

平成二十八年度 活動報告

平成二十八年度「肥後医育塾」年間テーマ「身近な病気と家族の健康」を開催

常任理事（事業担当） 遠藤 文夫

県民一人ひとりが豊かで健康的な生活を送れることを目指して、（公財）肥後医育振興会、（一財）化学及血清療法研究所及び熊本日日新聞社の主催で、年間テーマに「身近な病気と家族の健康」を取り上げ、三回の市民公開セミナー（第五十八回〜第六十回）を鶴屋ホール、くまもと県民交流館パレア、ホテルニューオータニ熊本で開催するとともに、毎回熊本日日新聞紙上で「肥後医育塾特集」を二ページに亘って内容を紹介しました。さらに、熊本地震被災者や家族への医学医療情報提供のために、熊本日日新聞社と共催で臨時の肥後医育塾を開催しました。

「認知症」、「糖尿病」、「子どもの健康」を取り上げ、誰にとっても身近に起こり得る病気や健康について、それぞれの基礎知識について専門医の先生方から分かりやすく解説していただきました。第五十八回は、九月十八日（日）に鶴屋ホールにおいて、「認知症〜上手な予防、上手な介護〜」と題して開催しました。

本人にとっても家族にとっても関心が高い認知症。高齢者人口の増加とともに認知症患者も増加しており、全国的にも関心が広がっています。今回は、早期発見の重要性や予防策と治療法、家族や地域がどのように支えていけばよいのかなどについて、それぞれの専門の先生方に分かりやすく解説していただきました。第十七回日本早期認知症学会学術大会と共同で開催しました。講演では、司会を肥後医育振興会常任理事の遠藤文夫が務め、座長を熊本大学名誉教授・肥後医育振興会理事長の西勝英先生にお願いしました。最初に記念講演として、山口県萩市の金谷天満宮の陽宮司から「八重子のハミングに寄せて」と題して、アルツハイマーの妻を介護した経験を語っていただきました。講演の一番目は、熊本大学保健センター教授の藤瀬 昇先生から「早期認知症と高齢者のうつ病」と題して、高齢者のうつ病を中心に、認知症との関連につ

いて講演をいただきました。講演の二番目は、熊本県健康福祉部長寿社会局認知症対策・地域ケア推進課課長補佐の美並典孝氏から「熊本県における認知症施策の推進について」と題して、多くの関係機関、関係者とともに、県民が住み慣れた地域で安心して暮らすことができる社会をめざし、今後も施策を展開していくことについて講演をいただきました。

講演の三番目は、桜十字病院副看護部長の今村加代氏から「やさしく見守るー認知症患者さんへの心遣いー」と題して、認知症の患者さんが不安や戸惑いを抱き生活している中で、その心の内面に共感し、やさしい心遣いのあり方を臨床現場からお話ししていただきました。講演終了後の質疑応答は、あらかじめ寄せられた質問に講演者が答える形で行いました。約四〇〇人の来場者があり、内容を、十月十九日の熊本日日新聞紙面に掲載しました。第五十九回は、十一月十四日（月）にくまもと県民交流館パレアにおいて、「みんなで減らそう、糖尿病」と題して開催しました。平成二十八年は、十一月十四日が世界糖尿病デーに指定されて十周年でした。糖尿病は自覚症状が少ないために、受診をしない人も多く発見が遅れることもあります。糖尿病に関する症状や対処法、予防法などについて、それぞれの専門の

先生方に分かりやすく解説していただきました。熊本県糖尿病対策会議と共同で開催しました。講演では、座長を熊本大学大学院生命科学研究所代謝内科学分野教授の荒木栄一先生及び熊本総合病院副院長・糖尿病センター長・健康管理センター長の岸川秀樹先生にお願いしました。

最初の講演は、熊本県健康福祉部健康局健康づくり推進課長の坂本弘一氏から「熊本県における糖尿病の現状と対策」と題して、関係機関と連携して「保健医療連携体制整備事業」に取り組み、糖尿病の発症・重症化・合併症予防の体制づくりを進めていることなどについて講演をいただきました。講演の二番目は、菊池郡市医師会立病院院長の豊永哲至先生から「糖尿病の早期治療の重要性」と題して、血糖・血圧・脂質・体重の管理を行うなどの早期治療の重要性について解りやすく解説していただきました。講演の三番目は、熊本大学医学部附属病院栄養管理部栄養管理室長の三島裕子氏から「糖尿病にならないための食事習慣とは？」と題して、糖尿病は早期から食事や運動など食生活習慣を改善することで合併症の発症や進展を防止できることなどについて講演をいただきました。講演の四番目は、熊本大学大学院生命科学研究所小児科学分野准教授の中村公俊先生から「子どもの時からできる糖尿